

東松山の歴史と地名の由来

第 22 期 歴史・郷土学部 課題研究 B 班



メンバー紹介 (◎リーダー、○サブリーダー)

後列左から

大西幸男、栗原 清、高杉信幸、高橋 勉、眞下 章

前列左から

江原廣子、◎小熊初江、○金井塚保子、関口幸子、山崎悦子

目 次

1 はじめに

2 松山地区について

3 高坂地区について

4 大岡地区について

5 唐子地区について

6 野本地区について

7 活動記録

8 まとめ

9 参考文献

1 はじめに

私たちは日常生活の中で、手紙を出す際に住所を記入したり、テレビや SNS のニュースや天気予報などで全国各地の地名を毎日、見聞きしたりすることが多いと思います。

地名は、なぜ、いつから、どのように付けられたのかと多くの事が心に浮かびます。

地名には、長い歴史の中で様々なケースもあると思いますが、その土地の地理などの歴史が集約されていると思います。

自分たちの住んでいる東松山市の歴史をより深く理解するため、地名の語源や由来、歴史、地理的変遷について調べ、その土地の歴史について紐解いていくことにしました。

市内の 5 地区（松山地区、高坂地区、大岡地区、唐子地区、野本地区）を 10 名で班ごとに現地調査や文献を精査して、課題研究を進めることにしました。

2 松山地区

(1) 松山町（まつやままち）の地名由来

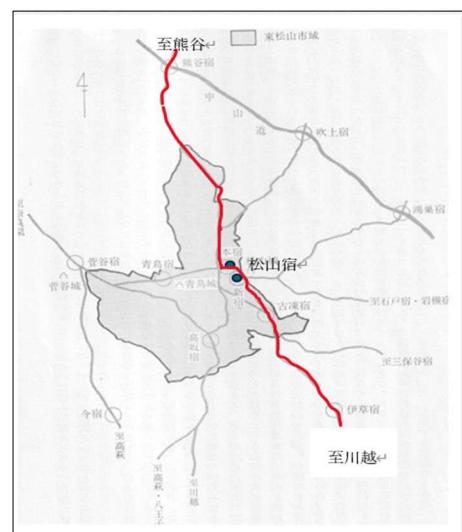
松山は松山台地の東端に位置しています。滑川、市野川とともに松山台地の北側を西から東に向かって流れ合流し、市野川となり南下します。松山台地はその流れに沿うようになっており、その右岸一帯は低地となっています。右の図の松山台地北端は、傾斜が緩く登りやすい形状となっています。



松山は鎌倉時代より川越、熊谷往還の宿場として栄え、地域行政の中心となっていました。松山とは松林のある台地で、松山=町屋（店舗併用の住宅）とも考えられ、道の交差する土地で集落が古くからあった宿場です。鎌倉時代（1185～1333）妙賢寺を中心に東西道と、元宿から南の新宿に下がる二本の道があり、元宿、新宿の順に宿場ができたと思われます。熊谷往還と、秩父、鎌倉道のそれぞれが、交わる交通の要所として、人々が集まり、宿場ができたようです。この時代には松山城はまだありません。松山の由来は城下町ではなく交通の要所としての宿場（町屋）からと考えます。

(2) 松山城と松山の関係

応永六年（1399）上田憲定が城郭ではなく砦として築城し、長禄六年（1457）太田道灌が手を加え松山城としました。お城は室町時代中期に作られましたが、度重なる戦火や室町幕府と関東管領との戦いで落城、奪回などの繰り返しで度々戦火にあいました。後北条時代にはおさまり、北条家の手厚い保護のもと、宿場には「六斎の市」（6回／月、例えば2と8が付く日）でたいそう賑ったと、武藏風土記稿に書かれています。本郷宿は本宿とも呼ばれ、ここが手狭になつたため、天正十三年（1585）新しく新宿が



できました。それぞれの家は奥行き三間の裏屋敷からなるものでした。

豊臣秀吉の小田原城攻めで、支城であった松山城も戦火にあい付近の寺院、神社までことごとく消滅しました。その後、徳川家康の関東進出で平和な時代となります。天正十八年（1590）松山城主上田忠頼が関ヶ原の役の功績で浜松に移封され廃城となりました。一国一城の徳川幕府の政策により、戦いに明け暮れた松山城の歴史に幕が下ろされました。

江戸中期時代、元文年間（1736～1741）の頃、元宿を起点として町並みは多くなり、市野川両岸に水田が広がりました。この頃、比企郡松山町として、徳川幕府の検地等の行政が加えられたと考えられます。川越、熊谷往還に、八王子道が坂戸・高坂方面から繋がり、日光東照宮へ行く八王子千人同心の街道となりました。

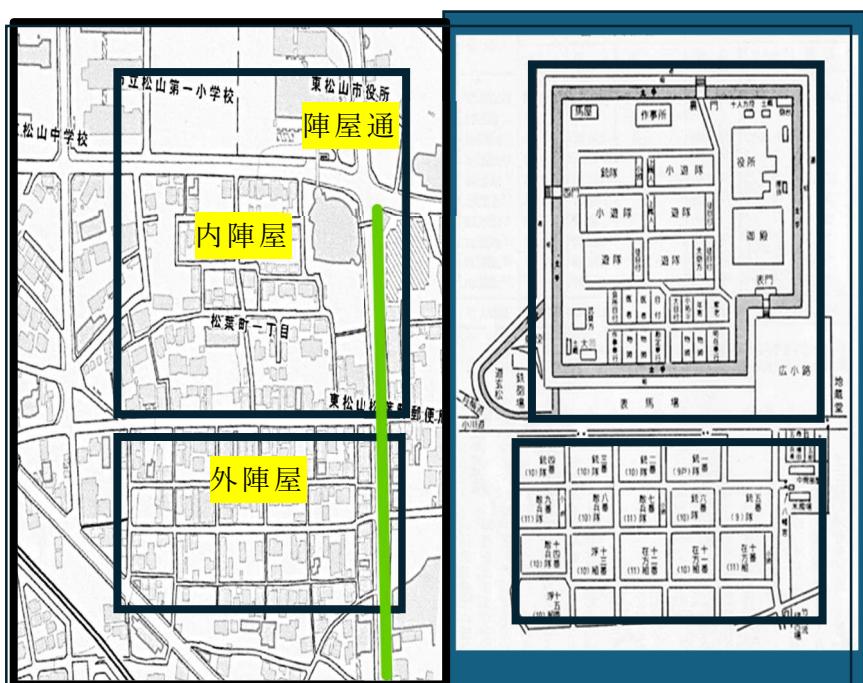
そこで、私たちは、松山地区発展の原点は元宿と考えます。

（3）松山陣屋について

慶應三年（1867）

川越城主松平伊豆守直克が前橋にお城を移すことになり、松山を中心に百六十三村約三万石の領地を持っていた松平伊豆守は、この領地の管理や警護のために、藩士二百五十八名を松山に残しました。

この藩士と家族が住むために松山



陣屋の配置図

陣屋が作られました。陣屋は内陣屋と外陣屋に分かれており、内陣屋は空堀と土塁で囲われ、役所や上層部の家族の住居となっていました。

外陣屋は鉄砲隊などの下級武士の住居となっていたと思われます。

武士としての生活は明治維新で終わりましたが、外陣屋は、昭和四十年代まで存在していました。

市役所正面玄関の東に前橋藩松山陣屋跡の石碑、松葉町八幡神社境内に鉄砲場石碑があります。藩士の一部の人たちが、その後もこの地に残り、今日の町の発展の礎になりました。

松葉町のメイン通りである「まるひろ通り」が、2024年8月、丸広百貨店東松山店の閉店により、

2025年4月1日より「まるひろ通り」から「陣屋通り」と改名されました。この通り

は松山陣屋の敷地内にあったので、松山の歴史に由来する相応しい名称であると思われます。



前橋藩松山陣屋跡の石碑

(4) 各町名の由来

本町	全国に分布し、正式には地名ではなく元の地名が焼失した形で残ったものと思われます。
神明町	各地に見られる名前で、神社のあるところ、または神社の付近につけられた良い名前【佳名】です。(箭弓稻荷神社の近く)
箭弓町	箭弓稻荷神社の門前町の名前です。
材木町	新しい地名で材木問屋が多く集まっていた町です。
松本町	松山の元(本)の宿場です。(妙賢寺付近、元宿)
松葉町	松林の端(葉は端の同義語)松山宿の端です。
日吉町	日吉(ひえ)大社をヒヨシとも称した。日吉神社を奉つる土地です。
築本町	魚を捕らえる『築』のある、川付近の土地です。
東平	東北地方によく見られる土地の名前、東に面した大地の名前をいい、東松山の民話に、松山城の城主が命名したとあります。
市ノ川	市野川の両岸にある台地及び湿地をさす地名です。
御茶山町	神明会館脇の尾稻荷神社に御神木があり、その下にきれいな清水が湧き出していました。この清水で入れるお茶がおいしいということで御茶山の名前が付きました。

小松原町
砂田町

日吉町の東部地域にある町で市街地の新しい拡張部分です。この地は市野川の右岸に当たり、「こ(小)・まつ(町)・はら(原)」、「すな(砂)・た(田)」で、川が浸積した砂質土壤の土地に付けられた地名です。

東松山全図



(5) 日吉町の名前の由来

日枝神社から（日吉神社とも呼ばれていました）名付けたとの事の様です。近くに湧き水もあり、その為に染色業や織物業に関連した職人の住居が多くありました。日枝神社は天台宗系の山の神を祀る神社で、水の守り神でもありました。また、近くには湧き水からの上沼があり、湖畔の北側には松山神社があります。境内には八雲神社もあり夏祭りの天王様や、大鳥神社の例大祭のお酉様になっています。

(6) 箭弓稻荷神社

箭弓稻荷神社社記によれば、当社の創建は和銅五年（712）とされます。東松山のほぼ中心にあり、鎌倉街道、日光街道、小諸街道の合流点に鎮座しています。地の利に恵まれ、また稻作の守り神「箭弓稻荷神社」は、多くの人々から信仰を集め「やきゅう（野久）稻荷」と呼ばれ、神社のある土地を「野久が原」と呼んでいました。平安中期、下総国の平忠常の乱のとき、源頼信が京から追討の任を命ぜられ、野久が原に本陣を張ったとされます。そこで頼信は近くにある野久稻荷の祠を見つけ、戦勝祈願をし、大勝利しました。以後、野久を矢・弓を意味する箭弓に替え箭弓稻荷神社と呼ぶようになったと言います。



箭弓稻荷神社

中世から近世にかけて歴代領主の手厚い保護を受け宝徳三年（1451）には川越城主大田道灌、元亀元年（1570）には松山城主上田朝直により社殿が造営されています。以来江戸中期以降も松山城主・川越城主の信仰を集め本殿、拝殿等が上棟されています。官と民の信仰を大きく集めた箭弓稻荷神社は江戸中期には門前町の旅籠数が松山宿の旅籠数を10軒程上回っていたと証文に記録されています。

なお、境内のぼたん園は、大正十二年（1923）に東武東上線坂戸～東松山間の竣工を祝し、東武鉄道初代社長根津嘉一郎氏が牡丹や松を奉納したことに始まり、東松山市の花は「ぼたん」となりました。

また、令和六年（2024）一月十九日付で国指定文化財建造物「箭弓稻荷神社本殿・幣殿・拝殿」に指定されました。

(7) 妙雲山 覚性寺

平将門を追討するために下向した藤原秀郷が天慶三年（940）創建。豊臣秀吉の小田原攻めの際焼失したものの、金剛院住職が再建（1603）、覚宥上人が中興したといわれています。明治七年、当地において寺小屋がおかれ、地域の子弟教育の場となり現在の松山第二小学校の前身となりました。



覚性寺

3 高坂地区

高坂地区の地形は、丘陵、台地、沖積地から形成されており、西から南東方向に傾斜しています。北には都幾川、南に越辺川がそれぞれ西から東に流れ、沖積地はこの川が作った低地です。台地では地下水を汲むのに12m以上掘り下げねばならず、昔の集落は、台地の端や沖積地の水田のなかに作られたと推測されます。台地の端には、現在でも高坂七清水として清水が湧き

出ています。

都幾川、越辺川とも現在より大きく乱流しており、人々は水害の被害に遭いながら改修工事を続け、現在の水路に近くなったのは江戸時代以降と思われます。

(1) 高坂

高坂は台地上にある集落です。沖積地の低地から急な坂を上った台地の上、高い坂の上に高坂宿があったところから高坂と呼ばれるようになったと考えられます。高坂台地は高済寺周辺で落差約 10m の坂があり、南の大黒部では台地部分が海拔 27m、低地が 19m、落差約 8m の坂があります。このように高い坂の上にある集落が高坂です。

南から八王子道の渡し場、坂戸市の島田宿で越辺川を渡り大黒部を過ぎ、坂を上ると高坂宿になります。高坂宿には八王子道と秩父道が通っており、その馬継場として栄え、この地区の中心になっていました。

江戸時代には八王子街道が整備され、宿場として繁栄しました。宿の北側で秩父道と八王子道が別れ、八王子道は高済寺下の都幾川の渡しを渡って日光方面にのびます。秩父道は台地の端を都幾川に沿ってのび、鎌倉街道と交錯しています。

① 高済寺

高済寺は曹洞宗の寺で大渓山と号しています。開山は下野本の無量寿寺六世の大渓和尚ですが開基は元和八年(1622)、加賀爪氏家臣斎藤助右衛門です。徳川幕府に仕えていた旗本加賀爪氏が、高坂地区の北半分を領有した際、高済寺を菩提寺にしました。本堂西の土壘の上に加賀爪氏の累代の墓があり、付近は加賀爪氏の陣屋跡でもありました。



高済寺

(2) 正代

高坂台地が東に張り出した部分を、中世には小さな台地という意味で「小代」と呼んでいたと思われます。三方が水田に囲まれ、七清水八坂あり、古くから開けた土地で、弥生式土器や埴輪等が畑から発掘されています。鎌倉武士小代氏が肥後国野原荘の地頭となって移住してしまった後、この土地は音を生かして正代となつたのではないかと思われます。児玉党の武将がこの地に住み小代氏を名乗りました。

① 青蓮寺

青蓮寺は天台宗の寺で常樂山仙住院と号しています。創建年代等は不詳ですが春慶が宝永二年(1705)



青蓮寺

中興開山したといいます。境内には弘安四年(1281)に建立された小代重俊の供養と、蒙古襲来に備えて九州に下った小代氏の武運を願って建立した弘安四年銘板石塔婆があります。弘安四年の銘は「弘安の役」の年に当たります。

(3) 毛塚

「け(毛)」は稻の穂先から稻を意味しており、江戸時代には広く農作物を指していました。「けつか」とは農作物の収穫できる農地の中にある塚という意味です。毛塚には昔から多くの古墳がありました。

① ザル坂

ザル坂は、元来はザレ坂といっていたのではないかと思います。ザレは崖等の急斜面という意味があり、急崖の坂ということです。ザレ坂がザル坂になったのではないかと思われます。

民話「昔いつの頃か、秋の収穫時夫婦で一日中稻刈りをし、稻束も運び終わり、最後に稻の刈跡の落穂を拾い集め、それをザルに入れ、妻がそれを持ち、この坂のところにさしかかりました。一日中の重労働ですっかり疲れてしまった妻は坂の中途にあった小石につまずいて、一穂一穂拾い集めた落ち穂を入れたザルを落としました。ザルはごろごろと転がり、落ち穂がすっかりこぼれてしまいました。妻があわてて拾い集めていますと、普段はおとなしい夫が忙しい時の働き疲れからか、かつとなつて妻を足蹴にしてしまいました。

打ち所が悪かったとみえ、妻は死んでしまったといいます。それ以来、夜村人が通ると女房が落としたザルの転がる音がするということです。」



ザル坂

(4) 田木

地名の場合は当て字の場合が多いので、「たぎ」という言葉の意味を考えてみると、「たぎ」はタギル(激)の語幹で、水(越辺川)が激しく流れる川という意味のようです。沖積地のやや高いところに集落があり、丘陵、台地を含む広い地域です。下田木の前で越辺川と高麗川が合流するので水流も激しく、この地を「たぎ」と呼ぶようになり、それが集落になったと思われます。

① 小田原神社

小田原神社は、慈眼寺の観定僧都が境内に寛永三年(1626)に創建しました。その後、享保十年(1725)に水田を隔てた現在の高台に移りました。「おだ」は湿



小田原神社

地を意味する古語で、「はら」は開墾地を意味しています。即ち、開墾の無事を祈って慈眼寺の境内から開墾地が北に移動するにつれ、現在地に移動したものと思われます。

(5) 岩殿

岩でできた御堂ということです。養老二年（718）僧逸海が岩穴に千手観音菩薩を安置し、傍らに草葺の小屋を建て正法庵としたのが始まりです。丘陵地で海拔100m～120mの場所にあります。古来より武将をはじめ多くの人々の信仰が厚く、門前町を形成し栄えていました。参道は各方面から通じています。戦国時代には戦場となり火災にあっています。

① 正法寺

正法寺真言宗智山派の寺院で、山号は巖殿山で坂東三十三観音の十番札所です。源頼朝は観音信仰に篤い人物であり、坂東三十三観音霊場の制定に深く関わっていました。当時札所を制定するにあたり、比企氏のお膝元であり、比企能員も深く帰依していた岩殿観音が第十番札所として選ばれることになりました。坂東第九番慈光寺(ときがわ町)、第十一番安楽寺(吉見町)とともに、比企郡では三十三札所のうち三つが札所となっています。頼朝が厚い信頼を寄せる比企能員の領地から有力寺院が推挙されました。



岩殿観音堂

② 門前町

門前町は大勢の人が札所巡りをしたためにできあがりました。札所巡りは初め武士や僧侶を中心でしたが、後に町人や百姓にまで普及しました。近世末までには仁王門の前から東西に延びる参道沿いに門前町が発展しました。その頃には宿屋17軒、小間物屋、餅菓子屋、綿屋、運送屋、油屋等35軒が軒を並べていました。仁王門前の丁子屋は、代表的な旅籠で「刺身は川越か、岩殿の丁子屋」と言われていたそうです。現在、参道の両脇の門前に屋号の表札が掲げられ、当時の門前町としての形態を今も残しています。



門前町

③ 鳴かずの池

正法寺に向かう参道の入口に鳴かずの池があります。この池は天正年間(1573～1592)に正法寺の中興の祖英俊が作ったとされています。九十九川が岩殿集落の北側を流れ、山麓沿いにこの池のあたりを流れるのが地形的に考えるのが自然です。川が流れず



鳴かずの池

に、池がある点にこの池が人工の池であることがわかります。その傍らに阿弥陀堂の板石塔婆があります。板碑は、高さ 260 cm、幅 58 cm、厚さ 8.5 cm で、市内で二番目に大きい板碑です。碑面には法華経の経文と五十名の法名、中央に応安元年(1368)戊辰八月二日庵主郎明 明超上人と刻まれています。ここに十三世紀末から十四世紀にかけて浄土思想に基づく寺院があったことが推定されます。その寺院の南面伽藍の前にあった池が鳴かずの池として残されているということです。

岩殿の坂上田村麿将軍の悪龍退治の話も、悪龍を退治して悪龍の首を鳴かずの池に埋めたので、それが原因で池の水が濁り、蛙の住めない池になったという伝説が生まれたのかも知れません。

(6) 西本宿

本宿は元々高坂村と一村をつくっていましたが、承応年間(1652~55)高坂村から分離しました。明治になり郡役所ができ、明治十二年(1879)松山町の本宿との混同を避ける意味で高坂の西にあることから西本宿になりました。

① 浅間神社

浅間神社は、関東管領である足利基氏が浅間神社を崇敬し、貞治元年(1362)に社殿を建立したといわれています。その後、元禄六年(1693)から正徳四年(1714)にかけて改築されています。浅間神社周辺には前方後円墳を含む三十数基の古墳があり諏訪山古墳群といわれています。諏訪山古墳は、全長 61m あり、五世紀初めの墳のものであって、県内では最古の前方後円墳であるといわれています。



浅間神社

② 悪戸 (あくと)

悪戸は、あ (接頭語)・く (腐) で、水生植物のまくも等の腐ったものが堆積している肥沃な土地という解釈と、あく (濁り水) と (処) で、洪水の起こりやすい場所とも解釈できます。現在、西本宿の小字として上悪戸(西本宿不燃物等埋立地周辺)、悪戸として存在します。



あくと

4 大岡地区

大岡地区は明治二十二年(1889)四月から施行された市制・町村制により、当時の大谷村、岡村が合併し、その地名は大谷村の大と岡村の岡を一字ずつ冠したことに由来します。この地名は昭和二十九年東松山市が誕生した後も続き、現在三千人が暮らす比企丘陵台地が多数残っている地域です。この地

は旧石器時代より人が住みついており、有名な古墳も発見されていますが、この大岡地区が注目されるようになったのは、1993年「滅びざるもの甦る比企一族」という歴史劇の公演を見たからと言われています。

平安時代末期から鎌倉時代初期に亘る約百年間、郡司として比企地方一帯を支配し、鎌倉幕府創立の原動力として大きな役割を果たした比企氏の存在を知ったからです。二代将軍源頼家の遺骨を抱いて修善寺より、この大谷村に逃げてきた若狭局に由来する伝説は八百年の歳月を経てもなお、地元の人々に口伝され、遠く離れた鎌倉の地を彷彿とさせる地名もここかしこに残っています。吉見町の長谷(ながやつ)が鎌倉では長谷(はせ)と読み、こちらの比企(ひき)は鎌倉では比企ヶ谷(ひきがやつ)と呼ばれ、滑川(なめがわ)も同じ漢字でも滑川(なめりがわ)となっています。宗悟寺の山号扇谷(おおぎだに)も鎌倉では(おおぎがやつ)と呼ばれ、地名の中にも近しさを感じずにはいられません。

なお、大谷地区は、長中、上郷、吉庚、野田、畠中、腰塚、亀の甲、水穴、神光谷、新屋敷の10地区があります。岡地区は、上岡、中岡、下岡の3地区があります。

(1) 光福寺の宝篋印塔

四国山光福寺の宝篋印塔は国指定の重要文化財で境内の収蔵庫に保存されております。沙彌閣阿が比丘尼妙明と藤原光貞の供養のため、元亨三年(1323)に造ったものです。鎌倉後期を代表する均整の取れた美しい塔で高さは2.1mあります。宝篋印塔は「宝印陀羅尼經」を納めたものです。

宝篋印塔基からの出土品として、白磁四耳壺があります。14世紀前半の中国製です。数珠は水晶で、五輪塔は青銅製で総高3.1cmです。他に仏舍利も出土しています。

(2) 大谷瓦窯跡

この瓦窯跡は、製作窯のことで「登り窯」と呼ばれる形態をもっています。飛鳥様式の寺院建築が盛んな奈良時代末期から平安時代にかけて使われた瓦を焼く登り窯で山の斜面を利用して作られた国の重要史跡です。

丘陵の斜面を堀り窪めて構築したもので、全長7.6m、幅1.1m、約30度の傾斜をもっています。

また、瓦用して13の段が形成されているなど、全体に補強工作が慎重に行われております。出土遺物は寺院の屋根に使われた軒丸瓦や平瓦、丸瓦、文字瓦などで、年代としては、白鳳時代です。しかし、その瓦がどこの寺



大谷瓦窯跡

院に使用されたかはまだ分かっていません。

昭和三十年発掘調査が行われ、その三年後 1958 年に国の史跡に指定されています。発掘調査の後は砂で埋められているので、現在は原型を見るることはできません。近くには「灰山」という小字名が残っているそうです。当時登り窯から次々出てくる灰の処理方法として近くに捨てていくうちに灰がいくつもの山を築いていったからの地名でしょう。しかし風が吹く度、その灰に手を焼いた事であろうと思うと愛された地名ではなかったのかもしれません。

(3) 扇谷山宗悟寺(曹洞宗)

この寺は扇谷山宗悟寺と称し、東京都豊島区赤塚の松月院末で本尊は釈迦如来です。天正二十年(1592)徳川家康の関東転封に伴い大谷村や山田村を知行した旗本森川金右衛門氏俊の菩提寺となりました。森川金右衛門氏俊は、寺を比丘尼山から現在の扇谷に移し、寺の名前を扇谷山宗悟寺と変えました。宗悟寺には若狭局が鎌倉より持ち帰ったとされる、頼家の位牌が今に伝わっています。また、本堂の裏手には森川氏累代の墓も置かれています。



宗悟寺

(4) 上岡馬頭観音(曹洞宗妙安寺地区内)

約 800 年前に鎌倉時代に創建されたと伝わっていますが、現在の御堂は大正三年に建立されました。源義経公が授かった黄金の尊像を納めた馬頭観音像が祀られており、その靈験あらたかさは関東地方随一と言われています。



上岡馬頭観音

古くは軍馬や農耕馬の守り観音として信仰を集めっていました。現在は競馬関係者も祈願に訪れており、馬体安全、愛馬活躍、厩舎繁栄、騎手大成、馬主大成などの御祈祷を受け付けています。

毎年二月十九日に開催される絵馬市(絵馬講)には、その模様が文化庁から「記録作成等の措置を講ずべき無形文化財」に指定されています。

5 唐子地区

唐子郷は南北朝時代からある郷名です。江戸時代は松山領に属し、天正十九年(1591)から文化八年(1811)まで旗本菅沼氏の知行地でしたが、文化八年幕府領、数か月後に川越藩主松平大和守の領地になり、慶応三年(1867)松平大和守が前橋藩主に移動したため前橋藩領になりました。明治二十二年

(1889) 上唐子・下唐子・神戸・葛袋・石橋の五村及び岩殿村の一部が合併して唐子村が成立しました。昭和二十六年(1951)月輪の一部を編入、昭和二十七年石橋、下唐子の一部から大字新郷を設置し、昭和二十九年一町四か村で東松山市が成立しました。唐子の地名については、唐子神社に合祀されている白髭神社があるところから、高麗人が開発した土地であるとしています。

また、この地は台地の端にあり都幾川が南端を流れています。「から(涸・乾)、こ(処)」で乾燥した場所をしめすといった自然地名の解釈もできます。

唐子郷は、中央に西から東へと都幾川が流れ、川を挟んで右岸左岸とも低地(沖積地)です。右岸は丘陵が迫っており左岸は台地となっています。台地には葛袋の渡し場から続く秩父道が西に向かって通っています。

(1) 上唐子

唐子が上下に分かれたのは、正保(1644~1647)の頃のことで、元禄(1688~1703)の図では上唐子・下唐子に分かれています。

① 浄空院

浄空院は、応和二年(962)天台宗の慈恵大師良源によって開山されました。その後、元亀・天正年間(1570~1592)に、これまでの天台宗から曹洞宗に転宗しました。文禄二年(1593)、徳川家康の家臣菅沼定吉は、永平寺から喚龍善応を招聘して中興しました。その際に、法勝寺から浄空院に改称されました。浄空院のある上唐子の小字、寺沢は浄空院のある沢という意味です。寺には菅沼氏一族の24基の墓があり、旗本菅沼氏の菩提寺となっています。



浄空院

(2) 下唐子

下唐子は、江戸時代に上唐子と同じような経過を辿りました。この地区の自然と生活については、打木村治『天の園』に詳しく描かれています。

① 唐子神社

唐子神社は、領主左兵衛佐 藤原重時が応永十八年(1411)に白髭大明神と称して字坂東に創建しました。徳川家康の関東入国後には、地頭菅沼越後守定吉が慶長九年(1604)に社殿を再建しました。天和二年(1682)菅沼吉広が都幾川の度重なる氾濫を避けるため、台地上の現在の地に遷座しました。白髭大明神は、自然信仰で長寿の神でありましたが、七世紀に高句麗から渡来者が増え、国内に散在している帰化人を集めて武藏国高麗群を置きました。高句麗王若光が首長



唐子神社

となりましたが、若光の没後高麗明神となり、若光が白髭を蓄えていたので高麗明神と白髭大明神が合一してしまいました。この地の小字の藩神は、外国の神の意『日本史広辞典』であり、帰化人の神社の白髭大明神のことと思われます。

② 高本集落

高本集落は下唐子にもかかわらず、都幾川を挟んで南に位置しています。都幾川はかつて岩殿丘陵の麓まで流れています。戸井田一族の人達が中心になって住むようになって集落ができました。小字の高本は山の麓にできた集落という意味です。高本は中世からできていた集落で、戸井田家には永祿元年(1558)の「武藏国比企郡高本邑田方水帳」及び「同畠方水帳」があり、水田中心の集落であったようです。



戸井田稻荷社

都幾川が現在の位置に瀕替えされるのは江戸初期のことです。戸井田稻荷社は、昔は水道庁舎の南に祀られていましたが、度重なる洪水に見舞われ、現在は高本地区に安置されています。

(3) 神戸

渡渉場（渡し場）の意で、都幾川の渡し場と考えられます。川岸のうちで一段と低くなっています。物を洗ったり水を汲みに来たりした場所と考えられます。丘陵地、台地から急に傾斜し低くなっている所です。この地は、丘陵、台地、沖積地からなり、都幾川が集落の北側を迂回しています。この地の開発は、最初は山間部に住んでいた人達が山から下りて平野部に住み着いたと言われています。旧家は小字横向、羽黒、茅場に宅地名義の土地が現在でも残されています。

① 妙昌寺

妙昌寺は、縁起によると、日蓮上人が文永八年(1271)に佐渡へ配流になった際に青鳥城に一泊し、それをきっかけとして弘安四年(1281)に青鳥城主・藤原利行が開基となって、日蓮上人が開山したことです。埼玉県指定文化財の日蓮供養板石塔婆は、高さ 159 cm、幅 40 cm、厚さ 7 cm あり、貞和二年(1346)日蓮上人の六十五回忌に当たり三代住職日願が二十六人の有志とともに建立したことが書かれています。碑面には「南無妙法蓮華経」の七字題目が日蓮宗独特の筆法(髭題目)で線刻された「題目板碑」の傑作として保存されていて、当時の市内における日蓮宗信仰の一端を知る重要な碑です。



妙昌寺

(4) 葛袋

「くず（崩れるの語幹）・ふくろ（袋）」で、都幾川が蛇行して大きな袋状になっている地形を言います。川、水に囲まれた荒地の土地で、荒地に自生する葛よりほかに作物のできなかつた地であったことなどから、地形から出た地名と思われます。

① 葛袋神社

葛袋神社の創建年代等は不詳ですが、かつて当地に標高 85m の坂東山の中腹に五社権現宮があり、村の南方にあった白髭神社・愛宕神社・八坂神社が祀られていて、白髭神社が村の鎮守でした。五社権現社に白髭神社、愛宕神社、八坂神社を明治四十年に合祀して、明治四十五年に神社名も葛袋神社になりました。



葛袋神社

(5) 石橋

大橋とともに橋の所在する地名で、交通・道に関係している地名です。葛袋から都幾川を渡り道の分かれるところで、左に秩父道、右に松山へ向かう道しるべがあったところと考えられています。青鳥城の堀に架けられた橋から付けられたと思われます。

① 青鳥城跡

青鳥城跡は、東松山台地の南縁に位置し、南面を天然の崖、その他三面を土塁と堀で守る平城です。

本郭を取り囲むように二の郭・三の郭が造られており、一部土塁と堀が現存しています。二の郭北面の堀と土塁には、「折（折邪）」と呼ばれる、あえて土塁と堀を折り曲げることで、外敵への攻撃面を増やす工夫が見て取れます。土塁頂部から掘り底まで約 6～7m の比高差があったと推定されており、現在の見た目以上に堅牢な守りであったことがわかります。



青鳥城跡



おため池

また、「おため池」と呼ばれる城跡東に所在する池も二の郭の一部と考えられています。池の辺には、比企・入間地方で最大の石碑である「虎御石（板碑）」応安二年（1369）が建立されています。高さ 3.75m 幅 72cm 厚さ 14cm で、鋭い三角形の山形、深い溝の二条線の額部の下に、大日如来を表す種子（諸仏を一字で表現した梵字）が力強く薬研彫されています。青鳥城主の七年忌に建立された碑です。

6 野本地区

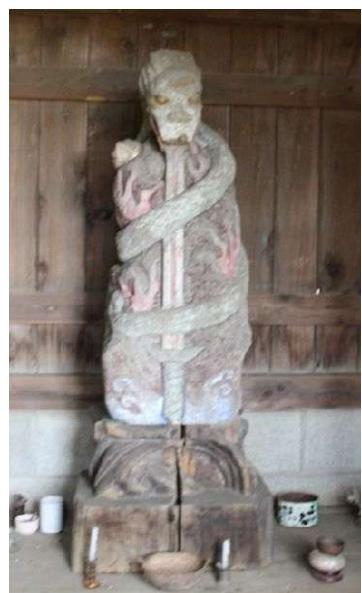
東松山台地の南、都幾川左岸に位置し、唐子の下流にあり台地の南端及び南東に突き出た舌状台地と都幾川の沖積地が、野本地区であり、東側は市野川の右岸となっています。大部分の集落があるのは、台地の南端で5m前後の崖を経て緩やかな傾斜地の部分で、残りは都幾川の自然堤防上にあります。

その崖下の部分には清水が湧きでており、不動沼に水神が祀られています。

俱利伽羅不動尊、江戸末期制作と思われるこの石仏は、黒竜が岩の上に立ててある剣を剣先から飲み込もうとしています。この不動尊は滝口や湧き出る水辺などに水神として多く祀られ、建てられたものです。集落の生活、田畠への供給など、人々が大切にしていた水への強い思いが分かります。崖下の湧き水口は唐子地区から野本を経て全長は数キロに及びます。

高坂の高済寺の渡し場から都幾川を渡り、押垂を通り将軍塚古墳の西側より台地に上がる日光街道は、ここで二つに分かれ、左は東松山箭弓稻荷神社に行き右は川越街道に入ります。都幾川・市野川とも現在の水路より大きく乱流しており、度々の改修で現在の水路になったのは、江戸時代以降と考えられます。

野本の将軍塚古墳は、6世紀にできたと思われ、全長120mの埼玉県でも有数の巨大古墳です。この他にも多数の古墳があり、古くから栄えた地域と思われます。中世にはこの地の地名を姓とした野本氏、押垂氏が活躍しています。



俱利伽羅不動尊

(1) 野本

野本の名は、室町時代から見られる地名です。野本郷という郷名が中世末から使われていますが、現在の東松山(古凍、今泉)、川島(長樂)をも含む広い地域を指しています。「のものと」の地名については『地名誌』によると「野とは山の麓の緩傾斜の地をいうから、『風土記稿』のごとく、比企丘陵のおこる地として野本の名が生じたとみるのが自然の考え方です。特にこの地帯は都幾川の水が豊かに流れ、日もよく照らし快適な居住地として古く注目されたのは、古凍に郡家(古代役所)が置かれたことでも証されよう。」とあります。野本という地名は、早くから開け、特に都幾川下流域は、湿地開発の拠点でした。無量寿寺・淨光寺の末寺が、川島に至るまで数多くあることが、それを証明しています。

① 無量寿寺

無量寿寺は曹洞宗の寺で、浜松市所在の石雲寺末寺ですが、創建年代

は定かではありません。『風土記稿』には、藤原利仁將軍が下野に移り住んだ後、一寺を建立し利仁山野本寺と号しました。その後建長六年（1254）銘の銅鐘が見つかったが焼損、刻まれた文字について拓本が残されていて、銅鐘に「野本寺」と刻まれていたと確認できます。

その後応仁の頃、寺は廃されました。長享年間（1487～88）に僧性岱が再び起こし、利仁山無量寿寺と改称しました。天正十九年（1591）徳川家康が関東入国したとき、寺領10石の朱印状を与えられました。

お寺本堂正面瓦と本堂内陣の彫刻に、葵の紋が大きく入っているのが印象的でした。野本一族の館跡の堀跡と土壘跡が戦前まで残されていたそうですが、現在は墓地の中に土壘らしきものがある程度です。

（2）下青鳥

当地の淨光寺の縁起には、開山覚誼がこの地に来たとき青い鳥がいたのでここを聖地として寺を建てたと書かれています。その故事により地名を青鳥にしたと言いますが、説得力があまりありません。

「源平盛衰記」にある頼朝が武藏国月田川（都幾川・昔はこの辺まで楓川と呼んでいた）のほとり青鳥野に陣を取ったという史実に適合しています。下青鳥から北の上野本の一部を、通称金谷と呼んでいます。都幾川で砂鉄が採れた時代の呼称が残ったものと言われています。

① 淨光寺

群馬県太田市長楽寺の末寺である淨光寺は仁治元年（1240）に青鳥山延命寺と号し覚誼が開山しました。宝治二年（1248）に後深草天皇の勅願所となり、成就院号を与えられ天正年間（1573～92）には現在地に移り、大願山成就院淨光寺となりました。慶安二年（1649）に徳川家光より寺領二十三石を与えられました（圓光寺分三石が含まれる）。明治三年（1870）の分院控帳には三十九ヶ寺の末寺を有すると記されており、その地域は都幾川下流の川島中山地区まで及んでいます。

② 氷川神社（下青鳥）

創建は天正十八年（1590）で、正徳五年（1715）に下青鳥の鎮守として、大宮の氷川神社より勧請されました。都幾川の改修工事が終了して洪水が起り易くなったからです。本殿は立派な彫刻があり箭弓稻荷神社の彫刻担当師が立ち寄って彫刻したと伝えられています。天保八～十年（1837～39）頃、箭弓稻荷神社は造替工事を休止しており、その間職人たちが食い扶持を得るため近在の社寺建立に携わっていたと言われています。

（3）柏崎

東松山台地の南東突出部にあり、地域の東方を市野川が流れています。

崎の付く地名は各地にあり、台地の先を表す地名です。柏の木が多くあったのでしょう。この地域は市野川、都幾川に挟まれた舌状台地のため、集落が発展し多くの古墳や住居跡が発掘されています。また、それ以降の時代も神社、仏閣が作られて現在に引き継がれています。

① 万松寺

曹洞宗万松寺は野本地区の無量寿寺の末寺、慶安二年（1649）家光朱印状十石を与えられました。樹齢五百年に達する「万松寺のシイ」は県指定天然記念物、現在は焼失し根元だけになっています。

(4) 古凍

地形的には、隣に位置する柏崎とほぼ同様で、東松山台地の南部突端に位置し南は川島町です。当地から柏崎にかけては、古墳や古代の遺跡が多くあり古くから集落が発展した地で、古代の郡家（古代役所）が置かれていました。『地名誌』には「古凍の名は、比企郡のいにしえの郡家であったのでこの名がおこったとみられる」と書かれています。

① 鷺神社

古凍の鎮守、鷺神社は社伝によりますと、治承二年（1178）鷺宮町の鷺神社から勧請して祀ったということです。鷺神社の祭りばやしは神田囃子の流れを汲み、その後中断しましたが、昭和三年（1928）復活しました。鷺神社ばやしは、鷺神社の祭りのほか箭弓稻荷神社初午や市内の催し等に出演しています。市の無形民俗文化財に指定されています。

(5) 今泉

古凍の北西に位置し、都幾川左岸に拡がる低地から東松山台地の突端部及び同台地の傾斜地を占めています。今泉は新しく出来た集落の意味で、南の都幾川の流路跡を開墾するためにできた集落だと推定されます。

今泉の地名は『小田原衆所領役帳』にもあり、中世末には集落ができていたことがわかります。

今泉の鷺神社の創建は、古凍の鷺神社とのかかわりはあったはずですが、詳しいことは分かっていません。

(6) 押垂

下野本下流の都幾川左岸、自然堤防上にあり、川に沿ってできた細長い土地です。押垂の「おし」は押し出す、「たれ」は川を意味し、急流が押し出すように流れている場所を指し、地名もその地形に由来すると言われています。押垂氏の名字の地『吾妻鏡』には、承久三年（1221）山城宇治の合戦で活躍した人の中に、押垂三郎兵衛尉の名があります。

7 活動記録

1	1月30日	課題研究の内容と役割分担について	研修室1
2	2月6日	課題研究のテーマ決定	研修室1
3	3月12日	班編成と役割分担について話し合い	研修室1
4	3月26日	各班の課題研究の企画、立案、原稿について	研修室1
5	4月中	市内5地区を各班でフィールドワーク	市内
6	5月29日	各班で編集方針について検討	研修室1
7	6月19日	テーマ毎に研究内容を調整	研修室1
8	7月3日	各班で原稿をまとめる	研修室1
9	9月4日	課題研究のまとめ	研修室1
10	10月2日	課題研究資料の編集・校正	研修室1
11	11月6日	課題研究資料の最終校正、発表の準備	研修室1

8 まとめ

日本の地名は、土地の地形や特産物、生息する動植物、幕府や藩の行政機関、神社や城といった建物、住んでいた人々の職業身分、出来事などいろいろなことに由来しています。その背景には、様々な民話や出来事が隠されています。つまり、地名にはその土地の地理などの歴史が集約されているといつてもよいと思います。自分たちの住んでいる東松山市の歴史をより深く理解するため、地名の語源と由来、歴史、地理的変遷について調べてみました。

地名の調査を進めていくと、明らかに地形や地理的な要件で名づけられたであろうと思われる地名もありますが、意味の分からぬるものが多く、過去の文献等を調査しても普遍性や妥当性や説得性を持つ物差しが見つかりませんでした。

調査は、先輩方が書き残された文献や日本歴史地名体系、新編武蔵風土記稿、岡田潔先生の著書、古老や住職からの聞き取りを参考にまとめました。

今回の研究で、東松山の歴史や地理、民話などを学び、中世の東松山に思いを馳せ、時空を超えた旅に出ることができました。

結びに、課題研究を進めるにあたり、大東文化大学文学部 落合義明教授をはじめとして、多くの方々からご協力をいただいたことに心より感謝申し上げます。

9 参考文献

- ・岡田潔（2023）「東松山の地名と歴史」まつやま書房
- ・平凡社地方資料センター編(1993)「日本歴史地名体系 第 11 卷(埼玉県の地名)」平凡社
- ・新編武蔵風土記稿刊行会(1957)「新編武蔵風土記稿 第 16 卷 比企郡 横見群」